



TITLE:

閉鎖性乾燥性亀頭炎

AUTHOR(S):

大森, 正治; 山口, 都美彦

---

CITATION:

大森, 正治 ...[et al]. 閉鎖性乾燥性亀頭炎. 泌尿器科紀要 1960, 6(5): 387-389

ISSUE DATE:

1960-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111947>

RIGHT:

## 閉鎖性乾燥性亀頭炎

久留米大学医学部泌尿器科学教室（主任 重松 俊教授）

助手 大 森 正 治

研究生 山 口 都 美 彦

## Balanitis Xerotica Obliterans

Masaharu OHMORI and Tomihiko Yamaguchi

*From the Department of Urology, Kurume University School of Medicine,  
Kurume, Japan**(Director : Prof. S. Shigematsu)*

In this paper the author dealt with the case on 30 years old male who showed clinical and histological findings corresponding to so-called Balanitis xerotica obliterans reported by Stühmer.

The patient was operated on his phimosis at the age of 18 and at that time urethral obturation was also pointed out by the physician. The symptom of urethral obturation became worse after the operation.

The clinical findings corresponded to the second type or Kraurosis alba among the 3 types classified by Peyre', and it was thought to be identical to Stühmer's Balanitis xerotica obliterans after operation.

## 緒 言

閉鎖性乾燥性亀頭炎 (Balanitis xerotica obliterans) (以後 B.x.o. と略称) は Delbanco (1908) が最初に Kraurosis penis の病名で報告, 肉眼的並びに組織学的に Kraurosis vulvae の萎縮期に相当すると記載し, 次で Krans & Galewsky が同様症例を発表した後, 1928年 Stühmer が包茎手術後に発生した亀頭, 包皮の萎縮現象を 5 例に経験し, 発生原因, 臨床症状及び経過において Leukoplakia (Leukokeratosis) penis (Kraus), Kraurosis glandis et praeputii (Delbanco) と異るとして B.x.o. post operationem なる診断名を付けた。以来かなりの報告があり, 本邦でも森本 高橋 弓削, 外松・楠瀬, 蔡等の報告があるが, 屢々見られる疾患ではないようである。

私も最近本疾患の一型と思われる症例に遭遇したのでその大要を報告する,

## 自 験 例

江崎某 30才 男

初診: 昭和32年 7 月 8 日

主訴: 尿線細小

家族歴に特記事項なく, 既往歴として18才時膀胱炎を経過したと云う。性病は否定している。

現病歴: 18才時包茎手術を受けたが当時自覚はしていなかったが尿道口が狭いとて尿道口切開術を同時に施行してもらった。その後2年位して排尿時軽度の腹圧を要することに気付き, 同時に尿道口の狭窄及び尿線細小を自覚したが自分で尿道口を引張って開くことが出来たので放置していた。然し排尿困難は年と共に漸次著明となり2~3カ月前より軽度の排尿痛, 尿線分裂等が加わるようになった為, 約1週間前開業医を訪れ注射及び内服療法を受けた。排尿痛は減じたが狭窄症状は全く変化なく尿線が著しく細小となり排尿に支障を来すようになったので来院した。

現症: 体格良好, 栄養佳良, 全身状態に異常はない。

右腎異常なく左腎軽度触知, 敏感である。膀胱部に異常を認めない。睪丸, 副睪丸, 精系及び前立腺に

異常はない。

尿は清澄，糖，蛋白<sup>+</sup> ウロビリノーゲン陰性。

血清梅毒反応陰性，血沈中等価 3.5，血液像では赤血球490万，血色素96%（ザリー），白血球数7200，百分率好酸球3.5%，好塩基球0.5%，好中球桿状7.5%，分葉球52.5%，淋巴球33.5%，単球2.5%。

局所所見：陰茎は包皮外板が直接亀頭に移行した感が強く，外尿道口周囲に直径約12mmに及ぶ色素脱失部があり表面滑沢，灰白色で皮膚萎縮が見られる。色素脱失部の周囲の亀頭の過半部は黒褐色斑状色素沈着が認められる。尿道口は羊皮紙様癬痕様上皮で被れ，直径2mmのゾンデが挿入出来る程度で，繫帯はかなり萎縮している。尿道口周囲の他，亀頭部に硬結，浸潤なく，其他の全身皮膚，粘膜に色素沈着は認められない（第1，第2図）

治療：尿道口切開を行うと閉塞部は尿道口表面を被覆した薄板様物で切開後 Dittel 11号 Bougie を容易に挿入し得た。切開後尿道粘膜の湿潤膨隆を認めた。

組織的所見：角質層は数層で不全角化は認められない。顆粒層も殆んど正常，棘細胞層は細胞間浮腫が軽度認められる。基底層も排列は殆んど正常だが，部分的に乳頭との境界不鮮明な部分があり，その直下に軽度の淋巴球浸潤をみる。表皮突起は幾分扁平化し，真皮は結合組織増殖があり細胞に乏しく浮腫状，均質化を示している。又，血管壁にもかなりの肥厚が認められ，真皮の弾力線維も相当減少している。表皮の萎縮は著明でないが，これは採取部位によるもので，臨床的にはかなりの萎縮部が認められる（第3図）

### 総括及び考按

Delbanco が最初に男子陰茎に於て女子外陰部萎縮期に相当する包皮陰茎の萎縮，尿道口狭窄を伴う亀頭の色素異常ある疾患を Kraurosis penis として報告し，その後 Kraus 及び Galewsky が同様症例を発表している。Galewsky は本症では罹患部に硬結又は皰皮症の変化を全然認めず且つ屢々尿道口の狭窄を招来するが，Leukoplakia では硬結を呈する白斑が亀頭に発生し尿道口の狭窄は認められないと云い，Kraus の例では持続的に屢々再発する亀頭炎を認めたという。

Peyré は本症に関して総括し本症の際発現する萎縮性病変を次の3型に区分した。

第1型 Kraurosis penis 又は Atropho-

dermia primitiva と称すべきもの

第2型 Kraurosis alba 又は Leukoplakie と称すべきもの

第3型 Kraurosis rubra 又は Erythroplasia と称すべきもの

以上3型の内，第1及び第3型は共に老人性変化として認められることが多く，第2型の Kraurosis alba は第3期梅毒乃至その他の性病に関連して発生する癬痕を基地として発現すると云い，罹患部の色は白色で漸次健康皮膚に移行し，粘膜の一部は肥厚して白色光沢を示し，亀頭の形がゆがみ非対称性となり尿道の閉塞を招来する。

Stühmer が B. x. o. nach operationem と記載した例はこの型に該当するもので，組織的には不全角化及び角質肥厚が認められ且つ後には組織の萎縮と上皮細胞層の変性を見るようになるものである。Stühmer は，2,30才台に発症し，包茎手術後湿潤した亀頭，包皮が機械的障礙，更に恐らく細菌感染も加わり炎症，組織変性を来し，表皮の肥厚，角質増殖，次いで萎縮に陥ることを特徴とした。然し包茎手術は必ずしも関係なく Stühmer 自身も非手術患者の症例を記載している。私の症例も包茎手術時すでに尿道口狭窄を指摘されて居り，外松等も包茎手術前に包皮縁の狭窄を来していたと云っている。

本症の組織的所見としては組織の炎症性肥厚並びに萎縮が認められ，乳頭層及び乳頭層下の弾力線維の欠乏，真皮に於ける浮腫，血管壁の肥厚等が認められると云われている。又，プラスマ細胞が多数に認められることも特有な所見であるとも云われている。私の症例も以上の様な所見が多少なりとも認められている。

B. x. o と Kraurosis penis とが同一疾患であると言う Freemann, Laymon 等の説は其の後の論者によつて認められているようであるが，B. x. o. と Leukoplakia 或は Lichen sclerosus, Scleroderma との異同の決定は必ずしも容易でないことは外松等も記述しているが，私の症例の臨床症状，組織的所見が先人の記述とよく一致するので一応 B. x. o. とし

て報告する。

### 結 語

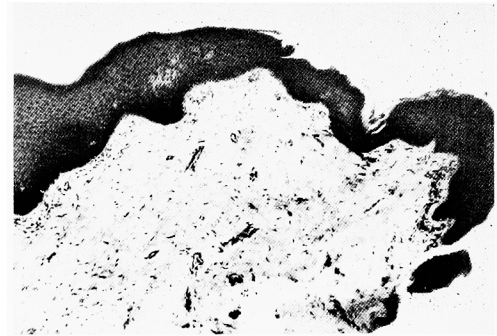
30才男の尿道口閉塞の1例を報告したが、臨床的、組織学的に *Kraurosis alba* (Peyré) 又は *B.x.o.* (Stühmer) と記載された例に相当するものと思われ、閉塞部切開、ブジー挿入で一応閉塞症状は軽快した。

### 文 献

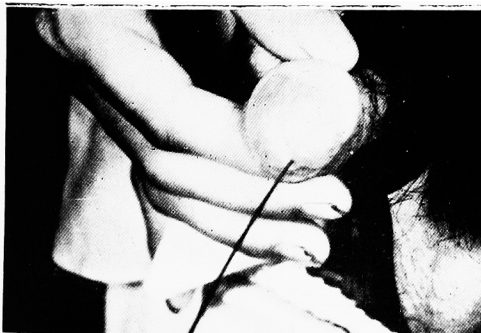
- 1) Campbell : Urology, 606, 1954. W. B. Sanders. Co. Philadelphia.
- 2) Delbanco, E. Arch. f. Dermat. u. Syph., 91 : 384, 1908.
- 3) Freeman, C. and Laymon, C. W. : A. M. A. Arch. Dermat. & Syph., 44 : 547, 1941.
- 4) Laymon : Arch. Dermat. & Syph., 64 : 620, 1951.
- 5) 森本 : 皮紀要, 18 : 407, 昭6.
- 6) 奥野 : 日本皮膚科全書, IV, 金原出版, 昭30.
- 7) Peyré, J. : ibid., 23 : 383, 1927.
- 8) 外松他 : 臨牀皮泌誌, 12 : 431, 1958.
- 9) 蔡他 : 臨牀皮泌誌, 12 : 435, 1958.
- 10) Stühmer, A. : Arch. f. Dermat. u. Syph., 156 : 613, 1928 ; 156 : 343, 1932.
- 11) 高橋・弓削 : 日泌尿誌, 46 : 733, 昭30.
- 12) Turley, H. K. and Shan, J. : J. Urol., 71 : 451, 1954.



第1図



第2図



第3図